

911.3
y"

全

卷之三

春

曹光

正月

[illegible]

増山井四季之詞

春

春陽 春帝 陽春 蒼天 東君
詔光

正月

まつま ちる日 蓋玉 初日 日 かきそめ日 日 いち日 上陽
蓋玉 大簇陽日 王春之日 左傳 初陽 阪日 見礼 夏正 ちる日 飯

正月ハ親疎中むつふあまむつと日ともさうそれを畧してむつに
とハさうと蓋玉乃後十五日雨水の節の初昏子斗柄寅方まきさう
故子さうの日ともいふて寅ハ夏の節の正日とて夏正とハさう
十二律の大簇は月子准れハ大簇ともさう

元日

けさあききふのき 四方のき ちる日のをさうさう乃始
こつめした年の始 ちるきあき ちるきあき とし



あうま年、いとし
新ま年、上日年以雞旦聖節改旦
歳且年のくわ時のそわ月のそわられハ三姑三元元ニちとも
しり年の相鳥路日の野ちれハ三のぢたといひて

世方拜

星をさふ付
卯
辰

元正の寅の時よりさ属星をさへて地四方乃山陸を
 毎時より年災を拂ひ空祓を祈りさへてはるや
 於に次乃と云 星をさへるとい年中祈事の要なること
 尚年の星本命星をまつて返つてさへてはるやと云ふ
 在家乃世俗星佛としてさへてはるやと云ふ

萬固

[illegible]

世説曰昔云々といひてさうお説は向ふりへいつちあや
答人ハ嵩をて令とさるゝ嵩の字をさへともよむなり
嵩固ハさへをさへむなりと家内校讐をてゆつり其を
安んずハ情少納を松葉少ゆつり其の字をよふとて
さへをいふさへさへをいふてつひさへさへ一名を
おとさへと
いふなり藤玉菜をて或いふをとおとさへといふなり白
きこのより又さへをいふなり大根を用ゐる河海抄に
さへをいふなり一名をかきまといふなり藤玉菜なり

傳藥を供^クを

子屠蘇白散度瘴散

天宮屠蘇をきき下ゆをまづ糸子とて小糸をえりひてゆ万
一ちてゆでそふつと一公事根原より糸子いをさちと又童也

きつて大ふく難煮のふあは月さるる一説大晦日といふ此

年法乃神倭

元方棚日

ハシリサマヨ婆利賽女の神をえ方よそひて鏡を難煮と傳ふとい

毘沙門のくく経倭

あ夷

日元形を夷ちくくを雲をさめていそひあつり傳ふ

門の神棚

日在家の妻は神をうまて神をさふりあはうけよ

かをそちく伝ふり

門松

倭かきり松日かきり竹日

晴相筆監内傳ふ胡且將來う築あちくをちさふとおれと世話

四葉子松ハ千事をちさう竹ハあやを築あられハ年始乃

祝ひは月さる一乗神園の古祝傳ふ傳ふ

かきりちく倭

日かきりちく日大きり日くさくあ炭日籠籠アリ

土佐日記よりくさくあちくを傳ふこれくさくて神社のあめを

ちりちちくとく六門くさくちくてハあちくく

かけ細

倭伝授海老くさく日

あ水

倭つと井くく井あ水あ水桶倭

玄年法生氣の方の井を器と蓋をして人あ汲をとりて立春の

モントツヤ日主水司内表くさくまうきハ船餉りてくさをきくめを年中の

船氣を除くとくふ事文傳ちあくと年中行事あ合ふくく

くさをつと井くくともいふああめくさくくああ水と云

くさ又世話あ云くくくくもあ日ハ井あ水とてあくく

くくくくくを伝ふり傳ふと傳ふくくくくくくくくく

五家よハ年男といふもの元日の子天ノ井の水を吸いをいふ
とて水とよはるて月い侍りーしと打をてハ立世の
りられハをるるて時ををさ侍りー是貞法流り
連歌よ是水元日といと俳諧よハふ月と

大ぶく 俳 元日おやうきとて茶を大福といひちて月と

餅 俳 三ヶ日よつまつ餅を糺きとよ月と

糺 俳 糺いふ日 人を糺ふ日いふも 日 糺ふ日 日 ひろま牛房日

ひろま 俳 あととー日 あまの 日 小くは

茶 俳 茶から日 うられ日 かものころあて 田つり 日 ち

かや 俳 かやと 柿梅やうー ち

抽 俳 抽し 棋子揃うさ 野老 秋あももかさるとハ元日

海 俳 海生海鳥と

江 俳 江次子も元日押船一杯と

年男 俳 年男と 日 ふく日とあ 日 ふくさうを福と

とて 俳 とて年とあ

年玉 俳 年玉日 年玉のちまねと

これ 俳 これ美帝の市にへる虫をう眼のひと

准 俳 准とと

ち 俳 ちと

とて 俳 とて

とて 俳 とて

四

二、三のうへに
まゝてはる

胡

介
槌
法
杖

の本を五尺にすつ子

以後は今の掌が幾分抑扶とて在家とてよく好ハ一人

あまのくけうをまいて俱利伽藍勢

ダイキヤウ

二日之二言とい東中事あり王以下二言あり

三
源

二日之是八天子之年始上令母后之為之行幸

[illegible]

二日之氣、按政圖白、部子妻の居、土居、平の上、アを

折之極其不可不之定其不可不之修

平氏物語のそととありとあり

とある

以格と爲てふをうゑる樂を爲りて至曲の

人も笏拍をそつふとて

三ヶ日 うるの連歌 二月あり

ふくく 千瘡万病膏 延喜式

元日は来ハ三月三日とありては三月三日ハ三月三日とありて
まじり新嘉入てあるをまじり新嘉入ては額并市耳乃
うりけりてとて事柄候 ころくともかやく膏薬とて
ころあはれとていふころ延喜式ハ千瘡万病膏とて

松の内 世話 ちちろ日改めはき日 世話

履端之文 元日人をかきりて改め 書言故事

履新之文 元日正旦はききりて人をかきりて改め 書言

叙位 五日或六日徳臣の年方を養一位を改め叙するなり

白鳥節會 七日あをむきあせり ヨシタテ 法皇の美白鳥あをむき

とてきりてはききりて改めハとて正月七日あをむき改め

年中の邪れを去とて本文を改めせしめて天子の御覽

あはれとてききりて改めハとて改めハとて改めハとて改め

とてきりて天竺の貝多所業ハ長さ七尺ありてきりて改め

あはれとてききりて改めハとて改めハとて改めハとて改め

七日正月 世話 ころのききりて改めハとて改めハとて改めハとて改め

ゆりし新嘉入て改めハとて改めハとて改めハとて改めハとて改め

人万病とて改めハとて改めハとて改めハとて改めハとて改め

人を帳子貼 フツ 正月一日を籍とて二日三日ハ改めハとて改め

五日ハ牛の馬七月八日とて改めハとて改めハとて改めハとて改め

ころ一日は籍をいふありて改めハとて改めハとて改めハとて改め

菜摘川神事 能 七日吉せうつての明神あり

寺會 ゴサイ 八日大經をよそ十四日まで七ケ日直勝王經を誦せしめて

物事をいひのりつゝゆるぐ 事極限

言説法修法 八日 宿直人 ト井ビト 徒如坐

是もきふより七日の間行を今奉金別畧られ八周年ハ胎前
畧年といふかきより修せし後七日の法修法といはれることなる後ハ

禁中あり

大元師法 八日 治癒者まで七日これを終る 云事 肝ノ字ヲヨニス

叙位 八日 其の位階を叙せしむるなり 内侍司の被さる

東國王子とて松島島より其の村のひらきよりききとて其地へ

こしこハニツ子を引らんとて云云ハ天子のちつちなる中終る傳

りや毎年ト文をいつて五位のつゝねを賜ふとて有るなり

紀元は季明といふ名をお供ふとて云

女王祿を賜ふ 同日 奉儀解災といふ衆門のうち幄のたてて女

王の祿を賜ふなり 又云 女王祿の字ヨニサル

常陸常乃神事 ナ日 孝隆國康徳明神の祭の日其のけさう人

あきいある時を男の文とを布の常と云あつて作ある

おはそかようつゝつゝ常をりて女のけさのやうなるて

それちちを常のやの男と祝くつゝなり 又云抄

夷祭 ナ日 西のきよて行か今日大坂の今まの夷のやろくも

人くきりつゝなり 能き

縣民の除目 ナ日 となりナニ回までニケ日とあるいふあり

分々の儀も野槌より爆竹ハとありて山縣とてこの人を
 犯しちやまをとおとせむとて侍りを元日のふふ事一文
 料銀より八出たり此元日因ふ六十五日の笑ふてふ事なり
 なき事ハ六十五日の夕内表より十八日なり

上元朔

五月のひるをふとふ竹樓をさるるあり

三九六
法華

十五日
これ面白くく勢をうそまうてふ内書

たふしつりふとく

木
同

うづつえ　うゑさむを　そそのけを　打戯水之

そよておれうものハ男子を産とて柳を折るハかゆの
本とちう寝るをゆ枕とてちう方のうへをうつしけと
いふやうて人をあつりこころや

小豆粥の素

佛
因月あつたを焚て今日天物を索北八年計の

軀を除くと云

平島の清粥

同日は内閣平定を祈る子粥を食して多中の田畑の

吉と相する

獅子

神事 旧
十月 修築山田事ありし十月十日大

ど松をにふりちよ

賭リユミマ

十八日 是八天子弓場より弓を以て射る事とて右に迎ふ

右答後世府の会人とも乃村ゆゑにけりといふに罰酒を飲らうひ
傍の方より音楽を奏せたりと追傍の答にこれに非らずと乃ら
大將村より餐を賜ふにねをうけあうとりて

巨非系

十九日 蕨民将集 乞ハ八幡の厄祓の事ナリ

もせ 山椒乃皮 錦走 きんそう 百千号

東のふ
 東のふ
 儲ふはふ

乃洞 去之 復由云仙境を以て 彼の所をも以て

二月 壬戌 月 菴玉 小室生月 日 仲春 夾 壬戌 日

今日 陽中 正日 といふとちうに けふさへ くるて 衣をふりて

きん こときりふとんりふ 栗茂抄 今帝ハ太皞々ゆ外ハ

勾芒律夾鍾よあゝるとそへ半文

中和節 二月一日之
驚蟄節 二月初九之

初年
 初の年といふより多し
 東福寺せんりう園月
 佛

水洞寺初年請
和象圖之
本寺觀世音
本寺觀世音
初年
也

教生子
とろろ子二月一日子まゐり代筆子百穀瓜李の菓種をへてとろろ子

萩菜 二月の上の丁の日大葉菜とて孔子第十哲の新説ありと

りて 礼記の玉制に菜を糝幣と奠て先師を祀るとあるを
糝奠とも糝菜とも云ふ 訓ふをさう方つとせむと云ふ年中

二月八日 五更 卯時 秋爽 乙未 未

春日祭
上、申日、先來、日、を、束、部、少、將、勅、使、之、る、而、日、ハ、内、侍、

向不出車也。上歸矣。也。今日向ふ。と云ふ。

大原野糸
上ノ目ナニ事有糸と曰一と云々
是モ在日明神ノ

四年祭
四日去社玄以下三千百廿二箇の社を定めけし事ありせ

雨といふは提要録に之社の外は后土とも有於氏を以て共工氏の
ふく水土を予けつる故に社より土を以て社主と云ふ要

松殿より柏岡より栗と稱歎よ在王者五色の土を封一に社と
候を述と禹貢注よあり

因宗ち寂勝云 十九日より五日延久五年子姑之と 松本抄

天王ち聖靈會 廿二日聖徳太子の徳忌日とて天王ちとてはゆ

あり徳日伶人乃年あり

北野乃法忌日 廿五日天徳と律の法忌日とて此ハ吉祥院より八講

あり書取女の人く行ふとある

季は續経 或三月中末と大般若行ひ終ふ 日

二日亥 他 同出より日 是より二八月あまをりも一と乃

季とより少後とつ小字とて秋と

彼者 日 時正 これも果て後の彼者い秋と終幸と乃ヨ所

臺子樹あり二月より不開まで七日七夜より一て落秋八月よりあり枕

天帝釈尊と名ありて今も其の七日の経世の若人悪人の名を

あるより此ハ彼者七男の若人果を修るとい新樹其の記を

今うちをたをた 他 舊化して鳩とある 日令

繼尾乃鷹 白尾の鷹負徳云有影形は長鷹の尾をたのきと

ありてそ白ふねを繼人まをりや色は尾を重とて山へ

ゆらんちとらんといふ 今の果 今の古果

鳥乃鳴 雉子 野雞 漢の呂后の婦を雉といふ此語を

いけてそ鳥ハ雉を野雞とて

きてそ鳥 鳴鳥 此よりより山 羽鷹 此より

くハ鳥雉ハ声をひきハ鳥也 鳥也云ハ鳥也

けしー^日

筆をえ 土の筆

杉葉 ^他

防風

さわさつ乃

^他中抄より集る

まうさー^日

菊のふき

菊のふき

まのふき

ふき

早蕨

^他 早蕨

蕨牛

紫茎

明証

堀川百首より

菊のふき

芦錐

ふき

^他 菊のふき

菊のふき

筋

^日 筋

昔

^日 川

海

い

紙

紙

蘇海集云 春の節いづかのやうに夏あはれとてとれりてふきとてとれり

ふきとてとれりてふきとてとれり

三日

休生 忌月 梅月 春をー^日

春を

仲姑

事文

姑洗

於芬

病月 春をー^日 梅月 春をー^日 仲姑 事文 姑洗 於芬

とハハハ 律中姑とて中姑ともなり 春律を春節日 花能九云

己の目乃をー^人

上巳 三日上の己日水をー^人 己の目乃をー^人

己の目乃をー^人 己の目乃をー^人 己の目乃をー^人

己の目乃をー^人 己の目乃をー^人 己の目乃をー^人

須磨の法

是は光福氏法 法は左近の時より一日己の目陰陽師より

己の目乃をー^人 己の目乃をー^人 己の目乃をー^人

曲水の宴

雲を流し 水を流し 水を流し

己の目乃をー^人 己の目乃をー^人 己の目乃をー^人

己の目乃をー^人 己の目乃をー^人 己の目乃をー^人

桃花の節 三日

桃の節

他

系條

日 系條

日 系條

日 系條

日 系條

柳絮 日 今日柳絮を海にー^人 柳絮を海にー^人 柳絮を海にー^人

本草子とともや 於抄 事文類聚 桐花生玉洞折葉暗金満といふ詩

句を上巳のうらふちうらふの故とて今も桐を散ひ折のうらふを
うけゆるや 桐餅の首周出王淫礼とて邪良懸着しぬ曲の宴う
成人業候を幽王とありとて王を味をめてく宗廟の宴へとい
つゝまうは是より政改りて世治りて一十帝御する人ゆ

貞徳云 桐合の二月二日はある故事と云ふは後三徳の節と云ふも
あつた事と云ふもあつた事と云ふは新うて起つてまゐるといふは唐の
中皇法明の帝は桐餅をうけ給うた位と云はれても治統坊を
かまふ事子五人をてて是を何と給うたり事文類聚に載りて
世説曰 昔も今日は是を給ふは此の事と云ふは今も朱雀院
天皇元多と云ふは桐餅十ある中一は或記するといふ先師も

此は難とも云はれぬハ事を持て給うる一ハいれあふハ是は
ちのほちのねちちのちとて給うる一ハ此の如くある元日もゆふの
細うもいれぬとて一は此の今日もいれぬとて一は此の今日も
あひいれぬとて一は此の今日もいれぬとて一は此の今日も
給大流は果も少くも一とてのゆ

青きとちむ 其の俗上巳に土を撒きをふく又二日と日上踏
青鞋履と云ふ盧公范諤節儀とあり四機活法といふ人日蜀人が戯事
竹を北よりとてまうとて二日 昔は山を登りてあはれ宴うとて
こゝろに北辰に他をいれぬとてやういふ殿に北をいれぬとて
こゝろに他をいれぬとてやういふ殿に北をいれぬとて

紫野ちの寂勝人等 七日 此寺に於て是の所とて毎年七七日に

王鍾を降せしむるなり 日

石清水修時の系 中平日南をせん先中辰日試承あり

年々竹葉のそとて竹枝をうきうきし仁壽殿のそとてうきうきし
つらうて陪臣追懐の古人未子うひもあをあらうとそとてや

あ日より大馬已下うきうきあを供衆人の習より一と試み五鼓のうき

きうきうきうきのうきうきうきうきうきうきうきうきうきうき

成龍の報賽のうきうき行いあらうとそとてや

結ぶ系 是書む形より此腹非ふあらうとそとてや

神祇友とそとてこれあらうとそとてや

定食 冬至より夏日清明の節の三日をうきうきあひ面會成り而る日

よりいそあらうとそとて推し賢人あらうとそとて一日とて二日とて

火を断とて魏武帝ハ北方の帝國をさうとそとてあひあひあひあひとて

老食をほをうきうき固井州の刺史とあひあひあひあひあひあひとて

そとてふり子推とて仁の賢老の本あらうとそとて井州の民は却て温

食をうきうきうきうきとてこれとて後にもまたあらうとそとて

ホの粥 食をうきうき中平記より 東一の熊 もし回

青精飯 事文 青精飯 是も食をうきうき相和のあをうきうきとて

光ちるもとてハ陽をうきうき道成の青精乾石氣とそとて

を亂起ともいふ

蹴毬乃戯也 半仙のうきうき是も食をうきうきとて蹴をうきうき

架を立て士女をうきうき立てて蹴をうきうきとてあひあひあひあひ

唐の天皇は中平の系を食ふ此蹴毬の戯とそとてあひあひあひあひ

帝半仙の戯とあそびつゝと天竺遺事有り

清明乃節

三月の節

榆柳の火を焼く

毛ハを食ふ

貯火をりつゝを清明の節に榆柳の火を取て煮るに近きう焼く

るりて皆をくるといふ事言はれりといふ事也

任者乃節干

三日

土佐の海に沈む

十日

石山祭

粟津祭

一日

一糸を煮る

十日

糸誦乃岡山忌

八日

水尾祭

九日

高稚法要会

十日

さくら祭

同日

う尾ハは煮かきとて煮るに近きう焼く

焼くに近きう焼くはう尾ハを煮るに近きう焼く

うりと煮るに近きう焼く

古野乃会式

十一日

礼拝講

他

十二三日 叡山於八王寺拜殿行

比良祭

他

十五日

祇園一切経會

十五日

壬生念佛

他

十五日

猿桶取 端戸 あき紅 湯きうとらうり

初学寺

十五日 康保年中に大内記を保胤を結成の罪をわらうん

として文道先主の学徒をもちて三月の日の十五日に

ゆり念松のそと一夜山月正田と組南名の佐将も此を

初学院に三系の子生を西のあきを煮るに近きう焼く

してをり所へ近きう焼く

暖湯の大念佛

十五日

壬生念佛

他

湯系祭

十八日

江戸

比良祭

十九日

高稚法要会

新供

九日

弘法師のまゝに八束を煮るに近きう焼く

仁和寺のまゝに八束を煮るに近きう焼く

中々

比良祭

頃のまへ

長安まへ入る

田氣化して鶉とぬ

三月廿五日

穀雨の節

三月中

澤せざる

月令

穀雨節、礼儀

水之日

壬辰日

交近

ちをまつ

爽鶉

あひふ

芳の香

ゆき香の所り春の香

香を懐む香の條

三月廿六日

香の香

香の香の香の香

香の香の香の香

香の香の香の香

香の香

香の香の香の香

香の香の香の香

香の香の香の香

香の香

香の香の香の香

香の香の香の香

香の香の香の香

香の香

香の香の香の香

香の香の香の香

香の香の香の香

香の香

香の香の香の香

香の香の香の香

香の香の香の香

香の香

香の香の香の香

香の香の香の香

香の香の香の香

香の香

香の香の香の香

香の香の香の香

香の香の香の香

桃

桃の香

桃の香の香の香

桃の香の香の香

桃の香

桃の香の香の香

桃の香の香の香

桃の香の香の香

桃の香

桃の香の香の香

桃の香の香の香

桃の香の香の香

桃の香

桃の香の香の香

桃の香の香の香

桃の香の香の香

桃の香

桃の香の香の香

桃の香の香の香

桃の香の香の香

桃の香

桃の香の香の香

桃の香の香の香

桃の香の香の香

桃の香

桃の香の香の香

桃の香の香の香

桃の香の香の香

桃の香

桃の香の香の香

桃の香の香の香

桃の香の香の香

桃の香

桃の香の香の香

桃の香の香の香

桃の香の香の香

桃の香

桃の香の香の香

桃の香の香の香

桃の香の香の香

桃の香

桃の香の香の香

桃の香の香の香

桃の香の香の香

花蓋
不錢他
不乃
白
不乃
仇
在乃

こころを憂ふをうさむる人 此中又宗うろろハ此書ハ西王と

[illegible]

能
出
方
日
至
日
之
宜
不
能

唐の長安の士女春は金糸にて奇りるるを

そて勝とせといふや天寶を事とせを公軍といひなるなり

不續
あなを
もふ
とふ
を
の
結
念
乃
都

五續の如くにも主を以てハ

案乃躍ハ 虫々をとりしと肝に

飛花日
飛花日
花乃綠日

五の長子 五守

山一の
新つる
孝少
梨
名
梨
玉
少

辛夷

卷一
白下江表
平義
仙雲

涼山^{りやうさん}一^{いち} 錦^{にしん}一^{いち} 能^の 予^よ 人^{にん} の 語^ご 一^{いち} 是^{こゝに} 聖^{せい} 茂^{もう} 山^{さん} 上^{じやう} へ 至^{いた} じ

山吹
歌を、身置云々、いふに、うゝむと、之と和名、葉と、順の

山吹とハハ調子も云はせの山吹子羽張る家於てくも、山吹あり

沉下土
木蓮華
赤面花

小朱乃志 同
小朱乃志 同
小朱乃志 同

桑樹子之方以
 馬跡木名
 杏子乃名
 カフモ

檣同 掃同 方同 光同

藤卷之五

はるばる 花の元 ちるばる 草の元 草の元 草の元

物犯 他 ちるばる 草の元 草の元 草の元

新菜 日 右菜 日 右菜 日 右菜 日 右菜 日 右菜 日

かくらへ 菊 日 桜菜 日 右菜 日 右菜 日 右菜 日 右菜 日

馬蘭 日 又 日 金鳳花 日 けりん 日

丁子菜 日 眉目 日 一使 日 一使 日 一使 日 一使 日

仙草 日 菊 日 日 日 日 日 日 日 日

三葉 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日

あさり 日 一使 日 一使 日 一使 日 一使 日 一使 日

あさり 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日

はるばる 衣 表 白 表 赤 表 白 表 赤 表 白 表 赤

うら山吹 表 表 表 日 表 表 表 日 表 表 表 日

夏 朱明 昊天

日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日

日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日

更衣 日 白堂 表 表 表 日 表 表 表 日 表 表 表 日

表 表 表 日 表 表 表 日 表 表 表 日 表 表 表 日

表 表 表 日 表 表 表 日 表 表 表 日 表 表 表 日

表 表 表 日 表 表 表 日 表 表 表 日 表 表 表 日

表 表 表 日 表 表 表 日 表 表 表 日 表 表 表 日

その儀より斎をまじけふ香をとりて併に流して祀る事なり
ちとと果時祀りて 戒壇本末図帳 八日 山門より

山崎系 他 同日天王ふく童似とふ 多か系 他 上巳迄は

江乃八幡系 中 介 平安天神系 平日を江乃系

今勢神衣系 十日 麻績連とふ氏人麻をうとて安和を織て

神明日よりをいふ云事

目系 中 申日 山王系 大宮聖眞子二宮八王子客人十降師三ま

以上七社外神奥船ニ幸遊して法儀なり

か久茂系 中 西 法形おひけ とうとう 上か茂法經中聖成別雷

古井の系 心を法形の日とふくをふく人ノ夢柱のとうとうを

くくおとせ供りおひかふとそうとふとふもいふあり

中山系 同日 こと冷水法おささるる神より

吉田系 十子日 吉田春日の事し中幼き山落々連立一組了

岡白の系 茂新 中 申 主人ハ系申して地下屋上人前馳之法幣唐棣なり

わけけを奉持置置係皆といふ物を石供とて東ちりい水子

まうき舞うとあり云事

三枝系 こと幸川系をいふとやと秋の節を酒樽うとうゆあうとふ

神祇合子よりありなり物なり云事

千因子 他 十二日 乙卯の節子神子童のまわりいふんいふ事

岩崎系 日 中 亥 愛家系とや 向日神系 中 辰

久世系 中 巳 清水地主系 九日

當麻法事 十日 中 將姫の忌日 延つ供者といふ

上環云 十五日 天王寺云 日光宗 十七日 菅ふふふ 中々に改

花信 十五日 大師のほろをぬき 神宗 馬をこ 神と

梅天 三ふふふふふふ 小満節 四月中

和清乃天 文選云と源氏云和して又清一とと 麦乃秋拂

爽夕娘 月令小満節の末也 青吹夕 娘 茶の先らさ日

ちうとふふ 廿日年 名西京牡丹 他 菫うふふ 花王 日 ちうふふ

ちうふふ 他 ちうふふふふふ 杜ふふ ちうふふふふふ 茶の先

菫ふふ 二ふふ 菫うふ ちうふふふふふ 他 一八

ちうふふ 他 ちうふふ 玉ふふ 一八

ちうふふ 日 舊薇 日 けふのふ 日 ちうふふ 日 風車 日

贈是貴 日 忠臣 日 ちうふふ 日 茶の先 日

柏ちう 貞徳伝多く又二役移くて他ふふ 卯のふ 男と卯ふ

彩根卯ふ 他 卯ふ 卯ふ 卯ふのふ 卯ふのふ

ちうふふ 他 ちうふふ 卯ふ 卯ふのふ 卯ふのふ

常盤木のふふ 桐乃む 他 てちうのふ 日

義人年 他 ちうふふのふふふふふ ちうふふ 又眉なりふふ

ちうふふ 他 ちうふふのふふふふふ ちうふふ

樹のふ 日 ちうふふのふ 日 ちうふふ 日

山首の花 日 ちうふふのふ 日 萩横 日 ちうふふ 日

梅乃ふ 日 竹の子ふふふふふ ちうふふ 日

ちうふふ 日 ちうふふのふ 日 ちうふふ 日

郭公 ちうふふふふふふふふふ ちうふふ 日

むん多 日
藤原雀 日
きりく多 日
蝙蝠 日
くえ多

蝙蝠

四
三
二
一

鹿乃袋角 日 言ややうふはるつの方とさういふてせ

夢乃名を
 是夢
 領部
 福里乃雀
 日

福里乃雀之——日

捧振虫 日
 蚊 蚊柱
 蚊帳 能
 蚊余 日

依
蚊
子
の
汚
れ
日

卯のふくし降
卯のふくし
卯のふくし

頤和

一夏於雪入仕安居
形心移移戶宜要期此住旦居

安居 形心移移戶安要期此住旦居

行和氏要覽、去之
方行を了

五
日
去
日
是
去
月
去
去
月
仲
夏
燕
賓
阜
月

甲苗目を買てさつとさつ
 律薩賓にあつた月の名とに

加茂の足柄
一日装束
松本系
同日

松本繁
同
同

二 昌蒲 三月 安ふの裏
 安ふくハ四月ノ末迄
 迄水金糸以

三月 安永の興
好く矢くハロフク在るの如く此を以

六府其物の二と南越の階の東馬子三又附の五を打てはくきと

肉膳司供早飯
山姥の古國今ありそまゝを焼とこ
松谷

山城の古國今ありて其を以て
と 松本

五日の節會 あやめのみつ あやめのみ 天子武徳殿より御幸なすて宴

天子許也 殿子知傳乃乃て冥

金を以て強はし弱を以てくはす皆あやあうをぞく典義なり

長々つゝささゝとまろろろとあり 三事

端午乃節 五ともそ 五めといたゝめのみ百とよふて五月八

五
も
ろ
め
とい
た
け
の
み
と
り
ふ
く
五
月
八

年の目へうて想年とも。そう毛もそいあ年とふん

菖蒲
 永々根
 菖蒲刀
 菖蒲のり
 比々常
 比々陽
 比々西

あやあやく 昆明の百節の草蔭の根を煮て之を故百節にけれん

園湯とあぶる 五日 夢をうてて必ちとある大哉礼

あつらふもあつらふなり 園湯の湯のあつらふなり

氣の美と 氣のあつらふなり 事丈

鵲の古と云 五陵に鵲を飼て五日の古の尖を

競渡 舟車 水馬 競渡とハ舟と河を渡るを速を

あつらふもあつらふなり 五日の古の尖を

あつらふもあつらふなり 五日の古の尖を

あつらふもあつらふなり 五日の古の尖を

あつらふもあつらふなり 五日の古の尖を

あつらふもあつらふなり 五日の古の尖を

あつらふもあつらふなり 五日の古の尖を

騎射 馬弓 年中行交う合云 五日五日終系流うてむういのりうを

あつらふもあつらふなり 五日の古の尖を

あつらふもあつらふなり 五日の古の尖を

あつらふもあつらふなり 五日の古の尖を

あつらふもあつらふなり 五日の古の尖を

あつらふもあつらふなり 五日の古の尖を

あつらふもあつらふなり 五日の古の尖を

あつらふもあつらふなり 五日の古の尖を

あつらふもあつらふなり 五日の古の尖を

あつらふもあつらふなり 五日の古の尖を

あつらふもあつらふなり 五日の古の尖を

沿午午時雨竹みまうくさ水之
 幸平

ホヒム

黃、成、以、示、

他
有
砂、抽、濤、馬、安、人、規、王、と、案、乃、天、手、と、後

さ月の後 百練盤 楊子江 是地年々 初をう 練ていふ 後之 李文

八日 きんぐとふをいひきりて落し

今又系 九日今月十日は東野よりさうり松といふ所おとびし

仙
十二日

支社系

同
其目
近江坂
幸之
為

廿五日

貞徳云村上天の國是之國忌とハ之子乃

此月も下りて有月之三日大肉子取し又去月おれい行ふ
 るゆふふふたりていふあり

東大奇

眞福寺 延暦寺 岡城寺 四ヶの古きものの中

秘古の書あるを以て後師とせし名辨王經を法海殿
より得たりと云ふ

此より毎年行事を今より五日のちうとせられし

是故一子成子未地之在得之未中條生小孫を多て

檢非違使ありてこゝをいへ

住吉の比田植

他

廿八日

おどろけ

日 同日

山田の比田植

日

芒種乃節

五日節

夏ふり目せ

比つ又雨

比つ又雨

梅乃雨

微雨 他

墜葉花地

比の雨より五月の節より雨の壬

の日より梅雨といふ

辛未綱目より又其梅雨といふ

虎乃雨

他

廿八日比日乃節祓成うるより日之末其乃虎乃

無佛よりなまふはをかり

祇園のう真洗

他

三十五日

半夏生

五月の中旬より土日くも日金より之を候ふ日

まふのれを不食といふ

蟬乃初

自今より夏至の節より

常乃

他

日金より反古をうとより松乃新嘗

まふ乃

あふ

葉乃

葉を刈

葉乃

和布を刈

ウキサ

葉乃

むのの

比のり

百合乃

比のり

比のり

紫陽乃

比のり

未摘

比のり

乃

高れ乃

比のり

比のり

下野乃

他

比のり

比のり

比のり

比のり

蕙

比のり

比のり

比のり

於乃

比のり

比のり

比のり

比のり

比のり

西彼乃

日

比のり

蚊帳

日

之
待月
之
之
林鍾
旦
月

書室

一日 氷室の時期 ミツキ 氷の如き 氷水 ミヅ 氷室の意 氷室の如く

氷後移小 他 貞徳之冰室の氷は四月一日より九月まで移るを抽るれ
とも六月一日を以て移るなりと云ふ所今更にお定むるべし

予今素子也月う鉢をるり延き式主水亦ふんふん熱目ちれい
 清膳も氷を司るをひのちそのとつふく深氏常夏のあきりも氷あり
 めをり侍うふ秋葉うぬ室室う様をそまうのりもあう又
 ぬ室のちもまうけいの世像ぬぬを氷に進へて朝月う侍う

忌日の汚敎を供え
一日忌目と云ふ不浄の心を打ふなりや

自決神 今島法律事を今日より始りしより一内膳司よりして其の心算
大座子の法を以て修めしと云ふ

一 燕酒　こけ　あけ　け　他　ひ　あ　は　と　こ　う　月　造　れ　い　あ　ま　く　け　ま　う　ゆ　あ　う　う
貞徳云　醋の字をうろ　あ　け　け　と　も　と　あ　い　あ　け　け　も　ま　こ　た　月　一　月
う　こ　月　毎　日　毎　日　な　る　と　云　奉　根　原　子　あ　う

六月廿四日
傳授の儀ト
十目
仲祇友の友人主安玉体は快つてありとを伝へ

癸卯年

月次乃奉^{十月}上^{十月}月毛之在六月上有与友諾社へ此幣を
をまうせ給ふ事

同月

云々 神饌を供せしむる云々 云々

十二月

とて伏せ沸粥赤き土忌みと存の焼け地をさへ三口食て沸
い者をさへ云々

七日

徳光王より天皇より官立を蒙り七月の宗より中納言秀吉公乃
時々の繁榮松崎旅所より近江あり

臨谷

白雲

人形棚子

每事必以公相

氣血の形に若し累を費長房をばとて

重陽子ちと子のりうてふ海くも

放下鉤

人形あり

舟

神功皇后磯良干珠洒珠をとりて三韓を討伐し倭を降す

岩戸山

田舎紀行のそ乃歩くきふ天地いもくふれきふ時まろくねる

幸多ふと云ふ天の心を以て
おろけなきは日月非

此方より経つよきもの國のちよきものを流しとてちよ

后山

神功皇后三韓を討たんとす松浦川に於て船が朽れし事
日辛卯之

孟宗山

此書の言中子箇擲るる多し山と

郭巨山曰金塘宅

琴石破山

蔡永の戴逵破琴之或伯牙斷絃

蛭蛄山

之車乎知不古傳之

白樂天山

道林禪師秦の望山の松の上に寺を造り寮和尚とて了樂天

行て同をより諸惡莫仍結善奉行の徳をより侍し

太子山 石唐太子天王の良材なりや山に入て杉の木は秋の傍を樹

形に侍くを杉の路のふ角を元亨天書に在

木賊山 石唐太子山の木賊なるに秋の傍の目よりなる

そのさるなり 戸山 石唐太子山の木賊なるに秋の傍の目よりなる

石唐太子山の木賊なるに秋の傍の目よりなる

石唐太子山の木賊なるに秋の傍の目よりなる

石唐太子山の木賊なるに秋の傍の目よりなる

山依山 天神山ニ 芝幹ニ

十四日 七日は唐太子山の木賊なるに秋の傍の目よりなる

石唐太子山の木賊なるに秋の傍の目よりなる

石唐太子山の木賊なるに秋の傍の目よりなる

石唐太子山の木賊なるに秋の傍の目よりなる

黒主 石唐太子山の木賊なるに秋の傍の目よりなる

役行者山 石唐太子山の木賊なるに秋の傍の目よりなる

石唐太子山の木賊なるに秋の傍の目よりなる

石唐太子山の木賊なるに秋の傍の目よりなる

鷹山 石唐太子山の木賊なるに秋の傍の目よりなる

石唐太子山の木賊なるに秋の傍の目よりなる

石唐太子山の木賊なるに秋の傍の目よりなる

石唐太子山の木賊なるに秋の傍の目よりなる

石唐太子山の木賊なるに秋の傍の目よりなる

石唐太子山の木賊なるに秋の傍の目よりなる

其後八幡奉行所の国をさし給ふ紙をいささしをあるに天正
武塔天神ともいふ疫癘の神とておろしきとて少将持のこゝハ稲田
姫とていふ女とす一所ハ大王子とて桑田に祭の所なりとす

津島祭 他 十五日舟をさして夜桃灯とてあそぶものとて尾張國に

熱田祭 日 十五日海邊に子さるあそびとていふ

つくー万祭 日 十五日 竹生堂祭 日

江戸の山王祭 他 十五日太田を灌文相多中子には山王様現を勧誘と

相國寺のせんり 他 十七日接門にて松貼とて銀鉢を鳴す

祇園修耐乃祭 十五日 勅使を東移をさしつ排代ハ坊の里とて

東移のうともあるとて 云々

かきう 他 十六日 嘉吉食 日 新嘉吉 日

世説に云ふ世事ある事ありとて彼説に嘉吉通宝といふ

勝といふとせんを妻殿とていふ 季吟云今のちうハ一

さりとのうとてあそびの孩とていふ又米一升六合おぼしめと

伊勢乃祭礼 他 十六七日 必祭も祭とて

鴨多祭 他 十六七日 必祭 志保乃祭 日 十七日 讚加

鹿乃祭 日 十九日 富士詣 日 一月より十日まであり 富士市

富士とていふ必祭とていふ洗物とていふとて

鞍乃竹切 日 廿日 志保乃詣 日 廿四日

松乃祭 日 廿五日 丹後 天満と神傳後 日 廿六日 天満

多とて位祭とて准て必祭とていふ 大坂乃祭 日 廿二日

かきうとていふ乃祭 日 三十日 竹生乃祭 日 同日

高橋家少日

うしろに高橋家をきくうりありかき茂のいよは

ありうり後乃ちて任高神代よりうりある日高の圃をきくうり
うり後一後乃ち付れはひ一神られしを任高の圃をきくうり
うり後のは後乃ちうりあり任高の圃をきくうり
うり後乃ちうりあり任高の圃をきくうり

ゆりうり

節折

昨日 竹を主よは任高の圃をきくうりてを任高の圃をきくうり

うりうりうりうり節折の余高竹をきくうりてを任高の圃をきくうり
うりうりうりうり節折の余高竹をきくうりてを任高の圃をきくうり

大後

昨日 竹を主よは任高の圃をきくうりてを任高の圃をきくうり

うりうりうりうり節折の余高竹をきくうりてを任高の圃をきくうり

うりうりうりうり節折の余高竹をきくうりてを任高の圃をきくうり

うりうりうりうり節折の余高竹をきくうりてを任高の圃をきくうり

形代

うりうりうりうり節折の余高竹をきくうりてを任高の圃をきくうり

うりうりうりうり節折の余高竹をきくうりてを任高の圃をきくうり

うりうりうりうり節折の余高竹をきくうりてを任高の圃をきくうり

うりうりうりうり節折の余高竹をきくうりてを任高の圃をきくうり

友神

川社 これも友神の川をきくうりてを任高の圃をきくうり

うりうりうりうり節折の余高竹をきくうりてを任高の圃をきくうり

小蠅

真高の蠅をきくうりてを任高の圃をきくうり

うりうりうりうり節折の余高竹をきくうりてを任高の圃をきくうり

結穴

昨日 竹を主よは任高の圃をきくうりてを任高の圃をきくうり

此角必境のまうらう

海三石

雷のふくまをくちまひ

小暑節 六月二十

溫圉月令

考辨つゝいを智ふ
月

大暑の節 六月廿七

腐草の螢とちる 月令

得暑

步月支圖

夕立 月令 大雨時令 行と云う 今

天賦節

六日 宋真宗祥符四年乙未の乙未の六月丙寅を天賜節と

言言故事

三伏

夏季後分三の庚の日を卯休とし八分此乃

庚を中伏といひ立秋の後亥朔の庚を末伏といふ。是を三伏といふ。又立秋の金之夏至は一陰生ても大感ある時故に三といふ。今も伏くくく子伏といふとて書言。秦の時よに伏祠を修して盡忠を

防くは伏目よりつゝるを後漢の時に伏目より鬼行とて後月
宅を閉するよりと云 本文

土用干

虫干虫拂八扇

扇車 仵

[illegible]

汗拭紅

筆

竹女 竹婦人

脚
与

たむらひ竹ふくむる

蓬より竹收竹毎ハ竹の結をいふ或ハ足をいふと云々て涼——

眠皮 目
 かゝる 亨 拙名
 凌霄 目
 ぎょう 目

きりん草

他

はるのふ

司

射干

日

一説くはあき

日

青雲

日

麻

梅麻

文引の糸

交りかむ

他

まき

日

麻を刈

いさ

二番刈

まも秋より

香露散

香露とらうも

蒜乃根

瓜

ま瓜

他

水

日

とま

日

胡

日

他

夕

い

他

干

日

豆

日

他

小角豆

日

新

日

日

日

日

日

蟬

う

他

日

日

日

日

日

夏虫

日

日

日

日

日

日

日

蟬

日

日

日

日

日

日

始

白藏

是天

金高

日景

爽籟

日

日

七月

子

日

日

日

日

日

日

夷則

日

日

日

日

日

日

日

文月

日

日

日

日

日

日

日

立秋

日

日

日

日

日

日

日

秋

日

日

日

日

日

日

日

女

日

日

日

日

日

日

日

秋

日

日

日

日

日

日

日

柳

日

日

日

日

日

日

日

採

日

日

日

日

日

日

日

北

日

日

日

日

日

日

日

星合 星系 星子向 星如契 织女 促 牛女 河鼓 七月 七月 七月

壬戌年 二月廿三日
壬戌年 二月廿三日

おもちゃとせむ 日本記 ちやう美

也乃乃川
 銀河 銀浪 銀漢 星河
 星合乃漢 星之乃漢 星乃漢所之

年々改定
一年々交泰の川を流るる
年々改定とも云ふ

善む之舟 善こし舟 善果の 後の舟とも 万葉に在

か
に
ま
の
橋
く
ま
の
ま
の
橋
と
も
お
ま
の
橋
と
い
ふ
も
な
う

事と云は織女に天帝の命を告ぐるを河を棄てて

あまを頼いて後梯をもちては父をもちてかゝる天帝

いふ中をわけて天のをりてきりて七月七日

まゝをいへば、
 所々鳥羽の
 橋を渡りて、
 織女と云ふ
 所なり。

又川ちよい舟にてゆかんちよもあまをさうへんをかり

又ふしんとする時
 石原を橋より下るを
 石原橋といふところ

又て此等よりなるものも二二星の全形

秋乃衣 貞衣玄衣之
胡詠子玄衣玄裳
浪疾無溫之似此是

キツカウテシ
乞巧奠
キカウニツリ

我糸系を琴に
糸系乃りて

[illegible]

此の書は、その根柢は、久野新の系といふものの系を公するに於て

ひかりうり 相傳竹竿以上糸多とあり きのこ 琴とい

筆の琴を稽古調々半呂半律一調々々々々々々々々々々

あゝとわたり交さうと書わたりし灯をみればわづらひて

あつた日物糸にうろあを軍の納束のるーとさう一たふ
うーとさう 乞巧針 とふーと婦人てめめ針の
糸をさうてふふふし 新楚歳時記より

七箇め地 早もあふさのさうぬ水をもて洗をつけて早め針を
握め糸 イモ 竿の糸を握め 糸 これハ此国の拙信さふ糸をさふ

糸の糸を握め糸を握め糸を握め糸を握め糸を握め
七日の糸節供 肉盤司さう糸を糸をさう糸を

糸餅 サハ 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅

糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅

糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅

糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅

糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅

糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅

糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅 糸餅

解夏第 浙東信なる日録をもておぼつゝて極楽は遠きといふ

秋氏要覽よりあり又ハ吉祥宗ともなり

水け第 従ふと奥山より紅雲のあやういそふとくううとるる

箱のりて又或はうきをたてて其のちむるなり

地所第 他廿四日壬午に地蔵より一臺の竹をそまつり作り

こころふ 奥山より山崎の地蔵のりてやけりも時と

總屋に 奥山より地蔵のりてやけりも時と

清雲宗の法上 十八日八所のりて 世経回するなり

相撲 ことしは月杓 壺に様なり 世経回するなり

とい誌國の信傳の人をわーあつて七月にお撲の節といひて天子乃
信傳よりりていふにわ撲はもまていふにいふにいふに

誌國のまふしをわしを信傳の事なりて 年中行事より 寛平七年の事なり

と信傳をさす 中來よりお撲の秋よりりて七月のお撲なり

けしといふにさめやういふもさめいふにさめとやういふにさめと

いふてもさめて秋よりりて

霧 霧の海 霧の色 胸のきり 霧のきり 霧のきり

稲妻 稲妻のきり 稲妻のきり 稲妻のきり 稲妻のきり

ひやう 爽氣 府のきり 國麻のきり 國麻のきり

木槿 木槿のきり 木槿のきり 木槿のきり 木槿のきり

むらさき 如市花 せんれい 如市 白紫 如市

秋 秋のきり 秋のきり 秋のきり 秋のきり 秋のきり

秋殿 葉戸 禁中殿ある所は清涼殿の北より

数えり方 扇一丈又花葉と咲て細きむらこを判りし 芭蕉

小車の花 他 まくらうり 日 桔梗 ありのなかに ちりきり 日

秋 ちりきり 葉ありハ他 貞徳云いあはれおのりられぬむらこ

他をむらこいを秋と 下は 新渚の春

むらこありハ他 まくらうり 葉ありハ月をくらうり ちりきり

ふ白し 柳の葉をくらうり 秋のふゆとふくあり

まくらハ葉 日 柳の葉をくらうり 日 柳の葉をくらうり

仙露花 日 柳の葉 葉師卒 日 柳の葉をくらうり

秋の葉 日 秋の葉をくらうり 日 柳の葉をくらうり

おくらハ 日 柳の葉をくらうり 日 柳の葉をくらうり

まくらハの春 日 やつとむ 日 ちりきり 日 柳の葉をくらうり

糸凡 日 柳の葉 日 柳の葉をくらうり 日 柳の葉をくらうり

柳乃ハ 日 早田 室のなかに 貞徳云いすのちりきり 日

おくらハ 日 柳の葉 日 柳の葉をくらうり 日 柳の葉をくらうり

柳の葉 日 柳の葉をくらうり 日 柳の葉をくらうり 日 柳の葉をくらうり

木虫 人あり 日 柳の葉 日 柳の葉をくらうり 日 柳の葉をくらうり

ちりきり 日 柳の葉 日 柳の葉をくらうり 日 柳の葉をくらうり

柳の葉 日 柳の葉をくらうり 日 柳の葉をくらうり 日 柳の葉をくらうり

虫 虫合 日 柳の葉 日 柳の葉をくらうり 日 柳の葉をくらうり

貞徳云 葉虫とくらうり 柳の葉 日 柳の葉をくらうり 日 柳の葉をくらうり

柳の葉 日 柳の葉をくらうり 日 柳の葉をくらうり 日 柳の葉をくらうり

柳の葉 日 柳の葉をくらうり 日 柳の葉をくらうり 日 柳の葉をくらうり

紙風
中い父意とくとき
時分れ秋なる又

田虫
 繭
 他
 處暑節
 七月中

有るを正せり 月令
 多全史 寧
 寧山

神鷹式八月
神鳥日
貞康云々

幼鷹と曰ふ幼鳥はともかくも吾等も幼鷹と云ふ故にぬけろを

高麗よりて得た所のものなるを愛する美の筆をとりて

夜々々々々々々々々々々々々々々々

鳩吹
 仲重抄子山鳩公秋山よりまけ人鳩よりまけ人

爲のやうなうさへは
 是處を以て在る不
 可なり

吟藁 仍
あつ藁 曰
うきとふ 曰

八月
去之 秋風自發至月足月 日 仲秋 南呂 壯月 中律

雞月 本堂より久々な祭月とて、初日八月の儀と

八
朔
子
亥
行
日

後醍醐の帝より此は軍事を熟さんとてを智のく

家々々々々々々々々々々々々々々々々々

肉と少油ありきとし之
又後深き味の建ちのたまりを

もろくろいふことと羊を折か土器とて

ね帰る傳うとくさるうさうの葉ユヅを入て帰る傳う

白露節 八月の節 天中節 八月一日 七月

所目生氣の方の本をきうてきうきうて八月一日天中乃常赤口

白舌は命減と書て門を押し大難望病は舌の毒をまぬ

あつてはふかき薪四束とていふ

水村系 他 一日二日 堀天柿系 他 二日四日

北野系 四 冒首の山系 日 夢見山系 日 林氏よりて枇杷とてて柿とてて

白鷺の山系 他 五日山門の傍りて事をを行とて ツルカ 敦賀系 他 十日

はくそ 十日 乙事根原定考 カクサ 乙事 四 月 撥階奏乃人々を撰出て

まゆとて 束宮の六位已上人を以て 藝能行出を撰て 栄壽を

揚ふ 日 月とていふ

いそ 日 乙事 他 十五日

元正天皇御宇 四年九月 是國より 吾國を奪んとて 時大菩薩の

神カよりて 教を退て 後教をわくの人を教とて 乙事 日 乙事 日 乙事 日

乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日

真由云 故云 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日

阿野津の八幡系 十五日 伊勢系 志賀八幡系 日 日

多由系 日 長門系 日 宇佐系 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日

乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日

乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日

月のけや 乙 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日

乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日

乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日

乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日

乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日 乙事 日

此祭王の鼻と云ふ所の事なり信田考ふるべし

幸日本紀より

素名祭 他 十八日

後の徳忌 他 素名祭より 秋分の節 八月中旬より

秋分祭 他 秋分祭の素名 他 秋分祭の素名 素名祭より

ありては毎多八月よりありては素名祭よりありては素名祭より

素名五刑を行ふに素名祭の素名よりありては素名祭より

あり 裾速一候ニイナハヤと云ふ

釋奠 上下日 先師并十哲を祭り 二日は同

秋社 秋分より素名祭よりありては素名祭より

封一社より素名祭よりありては素名祭より

新田町 貞徳云秋分素名祭よりありては素名祭より

秋の素 中より素名祭よりありては素名祭より

素名祭 他

本屏乃玉 日 葡萄 日 棚り 素名祭より

素名祭の素名 素名祭よりありては素名祭より

素名祭の素名 素名祭よりありては素名祭より

素名祭の素名 素名祭よりありては素名祭より

素名祭の素名 素名祭よりありては素名祭より

素名祭の素名 素名祭よりありては素名祭より

素名祭の素名 素名祭よりありては素名祭より

素名祭の素名 素名祭よりありては素名祭より

鳥の事一記つゝの事と曰く松葉のふかふかの事と云ふ

くさくさ 次桔梗 他 うろく 日

あけび 日 葉の事 日 秋 日 苗香の事 日 冬 日

かき 日 日 日 牛房 日 牛 日 葉の事 日

菜 日 日 日 かり 日 ま 日 日 日 日 日

くさくさ 日 菜 日 日 日 かり 日 日 日

衣 日 日 日 日 日 日 日

鶉 日 日 日 日 日 日 日

鶉 日 日 日 日 日 日 日

鶉 日 日 日 日 日 日 日

鶉 日 日 日 日 日 日 日

鳥の事一記つゝの事と曰く松葉のふかふかの事と云ふ

くさくさ 日 うろく 日

あけび 日 葉の事 日 秋 日 苗香の事 日 冬 日

かき 日 日 日 牛房 日 牛 日 葉の事 日

菜 日 日 日 かり 日 ま 日 日 日

くさくさ 日 菜 日 日 日 かり 日 日 日

衣 日 日 日 日 日 日 日

鶉 日 日 日 日 日 日 日

鶉 日 日 日 日 日 日 日

鶉 日 日 日 日 日 日 日

九月
十月
十一月
十二月
正月
二月
三月
四月
五月
六月
七月
八月

吳勝糸 向日東山 山口糸 日中巳午周防

吳勝糸 十八日あきしゆりへきく津の國地田うち

燕針て魚の法す所知使主を吳國につくし工女をそめ給ふ

足媛弟媛吳織元織四人の女をいふしきり足媛へ給ふ糸の胎形

大神のまかりをそめ津の國につくし日本紀にありけり元織を

あやことくしとふりし

吳利女糸 廿日あき室町のあきありきり九月のりしと申比

きり九月とより 先年此社宿禰糸予う向云此社伴糸を

あしきとそんちきとよりしきり此社つとれきり足媛を

あしきとより 予ききり足媛をそめあきありけり此社

つくりしきり けりしきりあきありけり人のむきあきありけり

ナリナリ 蘇子とそんちきとそめ給ふ山はきりゆきけりしきり

穀子とそんちきとそめ給ふきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

冬
エビス

旅夷系

同日

建仁寺川ありあり

建仁寺東面入宋の道あり

洋中より船風ありて舟をさぐり危うく波つゞいては夷を
舟中よりいりしれ吾等の蛭子海神の意ありし神も此世の難
ちりし支那船と無きなりて船ありし船を難くぬれし一て
此より安んじたりしなりて海神の旅人此世の難をいりし

八岐花乃次

他

古日伝説の城あり

上より竹田あり

天竺結縁灌頂

同日抄

太系系

十一日

牛系といふ

天系

廿二日

天満満流馬

廿五日大坂

木幡系

廿四日

東谷

廿四日

逆転系

同日

北山系

廿六日

福王神系

廿八日

本号歩荒林氷室市親といふ人あり

鳴鶴系

同日

津村

廿七日

津國

撰虫

殿上の道をとる人ありしなりて虫をいへてあるなり

野之乃別

原氏村をいふ事ありてあるなり

此系も秋ありてあるなり

七日よりいふなりてあるなり

いふなりてあるなり

いふなりてあるなり

冬

九月節

崔哈といふ

秋

いふなりてあるなり

菊

菊台

他

大白

日

碎楊妃

日

竹花 隱君子
そふ氣 社中少ふ氣和筆く氣和の事矣らる

氣を好むは、金銀美玉の事なり。ちよ、他物と事異なりて、唯、
義利氣をたゞきくと云ふ。

子
 る
 氣
 十日の氣
 筆の枯るるを以て之枯し

九月小神能
蕭子安子叔
子安長

霜降節 九月中
豺麋を祭る 月全

新紫
糸足紫
多きうろ
うろ
川内紫
時をたむくみひて
秋

受ふるといへても
 梅子葉
 梅子葉
 五三

木カ本ヘ
櫛カ檀ヘ

[illegible]

色之松
ゆるてのみ松
柿
いとう
部香

木ノ之ノ矣
板ノ之ノ矣
所ノ栗
柴ノ栗
和
弓ノ栗
弓ノ栗
弓ノ栗
弓ノ栗
弓ノ栗
燒ノ栗
同

推柴 堀川百景子推柴を冬に薪と云ふ一休

之為椎勿傷秋之
 柿似本練以取柿本長
 熟柿

耳干 筆柿 赤柿 柿つき 更 日 蜜柑 日

食
 甘
 曰
 之
 年
 曰
 曰
 抽
 曰
 不
 柚
 抽
 下
 抽
 下
 抽
 下
 抽
 下

豊刈橘 日
 餅多柑 日
 まるめろ 日
 果季の 日

拓榴 日 多子サクロウ 紫岩為栗 似
榧 日
胡桃 日

利永
生オクの浦梨
新の蔦梨
こころ他
あゝのこころ
その浦にぞしなう

ところ
 ところ
 標
 標
 園
 ひん

松子セウシ 松ハクのニ日 さいく日 せんごんの実ニ日

椿チンのニ日 たものニ日 南天のニ日 梅ウメのニ日 山本ニ日

聖山の松 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日

綿繡の林綿繡の林 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日

仙蓼センリョウ 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日

君上ミコノサマ 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日

山ヤマ 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日

老如ラウニョ 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日

由ユ 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日

草クサ 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日

松マツ 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日

新ニ 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日

尾ビ 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日

病ヤミ 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日

新ニ 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日

糸イト 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日

糸イト 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日

糸イト 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日

糸イト 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日

糸イト 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日 松マツのニ日

十月
三
時
自
春
初
至
陽
日
意

此月を神を月といふ其冊を箱一箱より取れり又四方の本を
 あらき此よりて其を月と人なりとあつちなり又此神を
 土神なりとせしめり世に四書六経林泉抄云天下の神を月
 をいふをいふを神を月とせしめり吾等乃法神なり
 此神なりとせしめり又書に神を月とせしめり
 又此神は陽神なりとせしめり又此神は陽神なりとせしめり
 又此神は陽神なりとせしめり又此神は陽神なりとせしめり

交秋の装束をきよき装束なりとてありとて

拾芥朽々主殿案頭をそとろくろくをたたくも炉火を進ませ
るなり

焦糟ロウゾウを食クフ
 一向
 ところへは荆楚の人食之 事文

ハイ
フ
多る民間の俗をうゑて煖極をうちてと若輩流の

禁中にも車を陸に引出す中葉強ふんふふ

亥子の縁
ユケンチウ
凶厳重
或は玄猪
十月五日縁を食せし

立冬節 十月の節

冬

五

射場始

二日 左の塙より塙の堀をつくり、方々
村場迄と、年中

行束のう合ふと天子弓場あり出立して弓を以て射す云郷
 以下束帯して弓を射る天子は射席を志うして弓矢を以
 て射のちあふてくると事根原

孫菊の宴

同日

留后詩を以て西を獨ふる主陽と曰ふ

達磨忌

四

十夜の念誦

日
五日
十
十五
二十
二十五
三十
三十五
四十
四十五
五十
五十五
六十
六十五
七十
七十五
八十
八十五
九十
九十五
一百

與福寺法集會

六四

九月廿日
七々日の乃南田堂にて妙法の

大令と云うは是は十月六日長安大内府の以是日之内府乃
佐子と嗣云々一也然るに

維摩云

十日

是日夕ナカニて七日奥秘ニて維ノ終ニ

金

上比上
戸
系

Vol.

上日價比之

トイ

十二日 日星上人忌日之

下元月

有ナキ也

水官解厄

正月上元は天官福を賜ふ。七月中元は地官罪を赦す。十月
下元は水官厄を赦す。又云水官主罪而司人

間の禍福の蓋をけしとて天囑ふとて石を龜を

水取こー他 一合より下 東福寺岡山忌 十月廿七日

二合と國師忌日し西天橋のおむきとるも此比の魚と

夷禪古田 南原次之 大社神事中書日 神集出書

神の過き 神近へ此日 小堂節ナ目申

法勝寺大系云 此四日より 廿八日まで五ヶ日のるこ 抄書

焼用他 火焼きる日 田所書 日 火桶 日 火桶 日 埋火

茶の口切 初時雨 時を村の西 夕時西側の時西社のーと

川る乃時雨 松風の時西 初初 花 花の移他 花の叙日 花柱日

花の茶 月の花 青女花 本枯 花をむきひても

花葉 花の茶 花の茶 花の茶 折るる

花の茶 花の茶 花の茶 花の茶 新水 花の木の根

花野の茶 花の茶 花の茶 花の茶 花の茶

花の茶 花の茶 花の茶 花の茶 花の茶

花の茶 花の茶 花の茶 花の茶 花の茶

花の茶 花の茶 花の茶 花の茶 花の茶

花の茶 花の茶 花の茶 花の茶 花の茶

花の茶 花の茶 花の茶 花の茶 花の茶

花の茶 花の茶 花の茶 花の茶 花の茶

花の茶 花の茶 花の茶 花の茶 花の茶

花の茶 花の茶 花の茶 花の茶 花の茶

花の茶 花の茶 花の茶 花の茶 花の茶

花の茶 花の茶 花の茶 花の茶 花の茶

鶯 あうのむらさき 鶯の香 鶯 カモダカ 鶯 ヨコウ 夜與ひ

鴨 あうのむらさき 鴨 鴨 カモ 鴨 ヨコウ 夜與ひ

生海草 日 鯉 日 櫛 スミガン 炭竈 炭白炭 炭 炭

熟炭 羊瑛とつら老熟の形に炭をて煙をきりて破りて朗誦集

綿 たうとく 綿 日 綿 日 綿 日 綿 日 綿 日

衾 まふり 衾 日 衾 日 衾 日 衾 日 衾 日

紙子 紙 蒲團 日 巾 日 巾 日 巾 日 巾 日

液雨 エキウ 液雨 日 液雨 日 液雨 日 液雨 日 液雨 日

冬 冬 冬 日 冬 日 冬 日 冬 日 冬 日

冬 冬 冬 日 冬 日 冬 日 冬 日 冬 日

ち ち ち 日 ち 日 ち 日 ち 日 ち 日

十一日 九月 九月 日 九月 日 九月 日 九月 日 九月 日

天正月 周の世より正月を正月とせり 天正月 日 天正月 日 天正月 日 天正月 日 天正月 日

不 不 不 日 不 日 不 日 不 日 不 日

曆 リヤク 曆 日 曆 日 曆 日 曆 日 曆 日

朔旦 朔旦 朔旦 日 朔旦 日 朔旦 日 朔旦 日 朔旦 日

一陽 一陽 一陽 日 一陽 日 一陽 日 一陽 日 一陽 日

一陽 一陽 一陽 日 一陽 日 一陽 日 一陽 日 一陽 日

一陽 一陽 一陽 日 一陽 日 一陽 日 一陽 日 一陽 日

一陽 一陽 一陽 日 一陽 日 一陽 日 一陽 日 一陽 日

吉田系 中申日 目吉系

同日

たむけのふいふもさう体よくて

本をさういふ

五節 中五日 帳基弑

その恒係六の年の五人の帝寧願して

天子は悦ぶさうくさうを悦びしめさういふ皆さういふ御して帳基は出さういふ
以直衣指書をしめては番をさういふ天子のいふさういふ指書をさういふ
世時のいふさういふ世をさういふさういふさういふ

殿上の劇碎

寅日 相親さういふさういふさういふさういふさういふさういふ

番をさういふの陣をさういふ五節のいふさういふさういふ

物の仗

さういふ帝のいふさういふさういふさういふさういふさういふ

あーをさういふのいふさういふさういふさういふさういふさういふ

臺女情賢

午日 清盛殿さういふさういふさういふさういふさういふさういふ

さういふさういふさういふさういふさういふさういふさういふさういふ

さういふさういふさういふさういふさういふさういふさういふさういふ

結鬼系

中寅日 結鬼系 結鬼系 結鬼系 結鬼系 結鬼系 結鬼系 結鬼系 結鬼系

あーさういふさういふさういふさういふさういふさういふさういふさういふ

新葺系

中卯日 新葺系 新葺系 新葺系 新葺系 新葺系 新葺系 新葺系 新葺系

十二せとさういふ

豊明節會

中辰日 豊明節會 豊明節會 豊明節會 豊明節會 豊明節會 豊明節會 豊明節會

さういふさういふさういふさういふさういふさういふさういふさういふ

目吉殿時の系

中申日 目吉殿時の系 目吉殿時の系 目吉殿時の系 目吉殿時の系 目吉殿時の系 目吉殿時の系 目吉殿時の系

はさういふさういふさういふさういふさういふさういふさういふさういふ

おさういふさういふさういふさういふさういふさういふさういふさういふ

かき茂時の系

下酉日 北系をさういふさういふさういふさういふさういふさういふさういふ

小忌衣 をろの社 山あいの社 ヒカケ 日蔭の系 日あけのうろ むととろもい

新島先生と申すの御人としてあるは、
日比の糸うつらうとも

神の心くろく
神の心くろく
神の心くろく

所知や
庭燎
林糸の曲の多
採拍子
林糸
まううふ

杖
筭
弓
斧
坐
立
走
片
抄
摺
拳
寫
こ
う
く
み
へ
る
地
を
い

そりおろそりとろろ
かう仲うふふ

大前張
多入本給堂
さきさき
高き紅井奈世
目録と

小前張 多松 高やいそ けうく 久つき 綿角 ちあ ちうと 田

きうくま とうとうれんそあうり

千策 卑亨 星

乃之誤也
知全比前
全約
乃公亦之
偏殿之

右律部字一引是也幸未安人委望案爲案抄之之紅系也抄之

火燒 能
苦楚何苦、律系の在るくんとくんとあきくんととの中へ

子ふり子日
大島素のちやうとく二俣大根うと徳傳子竹へ

草葉 八月 瑞雲のやうな草花のやうに

新玉津宮のおりて
十二月
みさの南鳥丸のりて
みさのえ位

後成之紀仿國玉津寄明神意
後讀一經了今也冷泉家今也

[illegible]

トタナ
るまをあふ せし末 煖き 香あり草

うろく 祭他 喜近 日 返き 日 練つゝ 日 細く 日

細郷 日 紋 日 石花 日 ひび 日 あう 日 吉香 日

吉香 日 北のま 日 吉香 日 堀川 日 吉香 日 つめ 日

極 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日

十二月 吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日

除日 大呂 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日

むうい 吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日
師を 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日
臘月 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日

乙未 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日

忌火 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日

吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日

吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日

吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日

吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日

吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日

吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日

吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日

吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日

吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日

吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日 吉香 日

三ツシフケ
清和上

下午日

藤人うくのきうらうを編りて巨殿案よりひて

土牛童子の像をうら

大々目

持事堂方の門は法御所を

うら中央をもて作り東西南北中央おのくても方は准かるゝの土牛を
まゐりしその板屋をこれ疫病を治せんといふとやとてうら
月令に季あつて月土牛を供りてとてまゐるをうらとて人えうら又
まゐるふみ目と土牛を供り農具を門におきて有司壇を供りて
あつこれ農事をもくむるをうらとて一季を編よと

存前の供りきあ

十三日

此供きりい大社祭の儀をそのあふなるを

さうあつて板屋をうら存前の供といふ十段とておまき事うらとて
うらた八墓とて山下の墓へ年の終り幣帛をうらとてうらと

署駢乃政 前まに

肉付所の清神系

天子肉付おし行事あり清神を刀自祝何らと

中幸を肉付おのあふ主姫案帳を引て官人座をうらとて来乃
清を二行き船て船ひうらとて和歌をうらとてて来来のあうとて
うらとて板屋をあつてあふは社系のあうらとて天照を社天乃
あつてあふは社系のあうらとて天照を社天乃
うらとて一日をあつてうらとていはいをうらとて社代乃とて
うらとてうらとて

寂勝ちの灌頂

十五日

松尾の儀にふり延願上人或は延願上人

祭

湯糟粥

八日

瞬八粥

五山とも又持事をもとてうらとて十二月

八日都の諸方より供物をうらとて子七室五味の粥をうらとて瞬八粥とて

大徳寺開山忌 廿二日

和布川の神事 晦日の辰巳乃刻に

神主海入行てめをうるとくにて元日は神ふりそくく作り

このあふの結を 晦日の夜候時夜更の樹下なる儀小祠をこふに里々

結をうくるなり行渡神をちとむることくやう天王寺の

石云法師總持よりゆきよ此樹より宿して結するの神よりあひて

行渡神のよりあてやうをす此結するの神前近きより一休作り

つりありさて法師總持誦の功力よりて此神補陀落山よせれ

親善の眷属と作りつるより作り

追儼 毎日 おまじひ ちやあや 逼儼 爆竹

大舎人寮鬼をつとめ陰陽寮ふふをある庭の庭よりよめる御

以下鬼を追ふ事上人相のりきりあて針するなりとあり ちや相保

唐にも疫神をちりしは依り赤憤息をて驅儼るを又爆竹をきり

節分 三友のふりあり ぶきて神系 仙 一々のそり をきり

みきり神いす表名令もききをつくる神よりやきあやきやる時ハ

かあおき乃 結をくくるなりもある神よりえきこのりきり神られハや

きふふよりてをきりてを求て焚ききり作り世襲りきり自來ハ

此氣をけりきりる上候きあきりきり神をきりきりきりきりきり

てきをくくるより作りきりきりきりきりきりきりきりきりきり

日回きりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

實松 結するなりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

編のりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

埃囊抄に宇多天皇の御時よりきりきりきりきりきりきりきり

二頭の鬼

都は外へへてこの昆所の告ありと彼ちのふ南塞とてふて
 まゐを打ててををうひ又と鼻とてふを人をもりんとする
 いふとひうまを門はゆふを船のふとてふふふふふ
 雲々ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
 本説いふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
 うふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

吉田之發

me

節々大竹又大焼る

厄如

厄

小室節

十月

かたし支那を以て神とする

10

大元會

十二月中

鷗波の心

2

晷
日

蠟

祭

壽子

清祀

僕のまゝに成の日穂のまゝに辰の日
昔のまゝに子のみを瞞角と云ふ
蝟も

同是し勝の先程を穿り、蟠の面社を穿る。夏のやまに赤くつひ殷うハ
法祀といふ因う、蛸系といふ漢より勝といふ勝は孫は様で部をとりて
先程を穿るぬえ又勝ハ接し新故交接のなく蟠は素より拙を食せ裂きて
牽きわてこととを穿るなりけり事又頗る要一

年内立要

小
時
至
此

他
晦日の方日

除水

茶の湯

菜尾

年天晦日

除年

年

流
子
年

年

元年

玉案

つとくまふ

久

卷之四

書

松多ふうゆうきとふふ人のふゆふとふふふふふふのふふ

五

報終は十百の時
是午時多て一日
なり

長江

堀川百三十一
おつちとてふれうと云ふ二

うれ
く
あをそふ日のあまふり
のりて
裏をたふさふまふなるなり

水季詞

神祇

神事

類訪系 信忠を相計の案い年中七十餘人

茶古の神

村拜られい案あふるふれり大く極ありとあり

梅乃之

ハリサイニヨ 佐和利妻女 難く 年毎い案

釋教

麻野園

貞徳公ふふのふと訓いりり信ふるて秋るへ

妙法蓮華

僧えのふふふびり

散まの役 妙法

楊柳親ま

香山高子

釈る因位はゆる傷をふれい一付のふりり

香山

とハるも難と貞徳信く 天竺をふりり香山く

天象

いれい少 ちりりい秋く電光ふふふと秋休るて極まふと

初風

初風の秋く初風の難く

雷

初風のふりり案

名所

和泉乃國

放生河

放生ふれ

桜川

柳乃街

柳乃水

橋乃都

菱乃乃

柏乃密

貞徳公ふふと難く

志加乃山越

堀川信常苗首六重番ふ合らふと案の難く物れと連例い

高土乃宮

貞徳信難くきゆとふと月と信案を案

栗摘川

生野

麻をりてふとふ

麻乃角

口皮

麻の毛乃筆

藤乃寺む虫

ふのむ

ふのむとふ秋く

内島

二ホドリ 日象 くらふり

花乃巢 花の葉 都鳥 貞徳とせお徳の体いあらうい

らんやう 貞徳の體く一役と秋く 秋津虫 日 かげろふ

蜻蛉 かへる 貞徳と難く 重雀毛の豹 目も尾も草毛木の葉

黒牡丹 剣刺牛をまきう 世も牡丹を枝を刺牛をまきう 牡丹とくう牛のう
干魚くく難く

植物

茶の葉 茶の葉あらうをまきう ときうるやうとまきうくくうん

お茶とくくうてくるふあらうく秋のふ茶とくくうてくるふ茶とくくう

目陰 いのちうう白きとまき 和布 茂く 茂くくく

枝の木 紅葉の木 貞徳と茶も茶もくくくくくく 柏 萩

子草 葉種 ちい秋く 葉島 磯菜 つむいとまき

花の葉 葉 浅茅 桜の木の花 椿 ちいとまき

むむくふいまき 櫛のふ ちいとくくくくくくくくく

くくくく 木の葉 貞徳と枝とくくくくくくくくくくくく

はくも くせぎ 貞徳と枯木をくくくくくくくくく

けり茶くくくく 青茶

人傳

末掃を 孝徳とあらうくくく 夕顔の上 難く 定蝶の玉

花の葉 ちいとくく 柳下惠 梅林和尚

萩野 貞徳と人のちくくく ちいとく 貞徳と難く

ちいとく ちい 苗裔 孫のちく 茂く 貞徳と難く

一 竹令骨 一 竹雀骨 一 竹令骨 一 竹令骨 一 竹令骨

節會 貞由云雜し 花子の狂言 柳文 竹の原文云く

雜事

梅壺 貞由云雜し 濃茶の多し 柳言 柳言 柳言

花壺 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言

様相 竹言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言

あつけ 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言

ちうに柱 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言

あつら 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言

美奈 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言

元日のうき木をさくらとてし 連年不雨云

平家物語を平記の古事子に附記し 貞由云 柳言 柳言 柳言

平家物語の如く 貞由云 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言

みよあ別いふ細ありて 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言

さくら木をさくらとてし 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言

中にも思ふ中川の言はしとて 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言

しきい教て可なりとて 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言

つけき目あつて一の言はしとて 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言

ちうにけりしとて 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言

柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言

柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言

柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言

柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言 柳言

[illegible]

志をうつけてうきなりて大なる病をなすなりけりあけていふこと
 連能のさうに各々のうきなりけりなほなほ准て批量なり——但し
 心付の事もあてなりけりなほなほ准て批量なり——但し
 居るを今より改ても詮らけぬいともかく能くもあてなりけり
 是にてうきなりけりなほなほ准て批量なり——但し
 志をうつけてうきなりて大なる病をなすなりけりあけていふこと
 連能のさうに各々のうきなりけりなほなほ准て批量なり——但し
 心付の事もあてなりけりなほなほ准て批量なり——但し
 居るを今より改ても詮らけぬいともかく能くもあてなりけり
 是にてうきなりけりなほなほ准て批量なり——但し

[Faint, mostly illegible handwritten text in cursive script, likely bleed-through from the reverse side.]

執筆付端作

貞祐云連歌五ヶ十ヶと紙抽ちと俳諧ハ
 多面顔外ハ俳諧と紙多連歌と云ハ俳作をも
 俳諧之連歌と云ふ事也 正保三年三月十日 旅花咲亭定 此後想懐旧
 經文名号之連歌号ハ俳諧ハ執筆
 懐紙ハ俳諧之連歌と云付て終るを結了也 此後
 但又傍ハ俳言ハ紙抽ちる方もあるハ其用之ハ
 先為常のやハ紙をわくハ書と云懐紙を以て又
 一書の中をわけて又書と云 此後 書をわくハ書をわけて相懐紙
 上をわけて又書と云 此後 書をわけて又書と云 此後
 何と云ふハ一書をわけて又書と云 此後 書をわけて又書と云 此後
 終る也此ハ一書と云近の方を何と云ハ一書と云

能諧之連歌とてけしむ時又發するを誦して端作
るう發するを誦してけしむ時又發するを誦して端作
るう發するを誦してけしむ時又發するを誦して端作
るう發するを誦してけしむ時又發するを誦して端作
るう發するを誦してけしむ時又發するを誦して端作
るう發するを誦してけしむ時又發するを誦して端作
るう發するを誦してけしむ時又發するを誦して端作
るう發するを誦してけしむ時又發するを誦して端作
るう發するを誦してけしむ時又發するを誦して端作
るう發するを誦してけしむ時又發するを誦して端作

書付て吟しあはるゝ紀文多き等の能諧もこれ
長川遊若折し宿りしをいふ懐旧の能諧乃
しゝるゝ一僕和の漢の折も旧あらし人老
敬をいふゝて立居あけしに眠らばゝハ
やう年時へ一能諧の二字紀氏たう某ううと
然つる文字をいふハ品言の癖かゝ習也又能諧と書
ふ若とて

寛文三年

卯霜月冬至日

洛下

季吟

宇邦主



安永三年甲午春正月再板

日本橋新右衛門町

戸倉屋喜兵衛

